

「広島神楽」定期公演へようこそ！

公演日 10月22日

出演団体のご紹介

高井神楽団 ～たかいかぐらだん～ (広島市佐伯区)

高井神楽団は佐伯区八幡三丁目に鎮座する八幡神社を拠点に活動しています。神楽団の歴史は古く、百数十年の伝統がありますが、一時期活動を休止していた時期がありました。しかし、地域の方々、神社関係者の方々の神楽復活を望む声に押され、平成9年に活動を再開し、現在に至っています。

近年は中国地方各地の神社への奉納、各種イベント、各地の競演(共演)大会、中国大連での公演など活動の場を広げ、昨年は第36回美都町神楽競演大会で準優勝、また今年8月に開催されました第39回陰陽選抜神楽競演大会で優勝するなど実績を重ねています。これからも応援して下さる神楽ファンの方々や観客の皆様に喜んで頂き、また感動して頂ける神楽団を目指し、舞方、奏楽、裏方一丸となり一生懸命演じてまいります。

19:00～ 演目①

土蜘蛛 ～つちぐも～

源頼光(みなもとのらいこう)が瘡病(おこりやまい)に掛かり、寝込んでいるところへト部季武(うらべすえたけ)、坂田公時(さかたのきんとき)がご機嫌伺いに訪れます。頼光は、侍女の胡蝶に典薬の守に薬を取りに行かせており、もう帰る頃だから安心して休むように命じて下がります。

やがて胡蝶が寝所を訪れ、典薬の守(てんやくのかみ)からもらったという薬湯を勧めます。勧められるままに、頼光がその薬湯を飲むと、さらに具合が悪くなり倒れてしまいました。実は胡蝶は葛城山(かつらぎざん)に棲む土蜘蛛で、頼光に恨みを抱き、頼光を毒殺しようとしたのです。

深夜になり、胡蝶は頼光に病状を訪ねます。そして、時は今と土蜘蛛の本性を現し、頼光に襲いかかります。しかし、頼光は名刀・膝切丸(ひざきりまる)を振って一太刀浴びせると土蜘蛛はあつという間に逃げ去ってしまいました。

この騒ぎを聞きつけたト部季武、坂田公時は土蜘蛛の血痕を頼りに葛城山にたどり着き、そこで土蜘蛛を見つけ、激しい戦いの後についに土蜘蛛を退治するという物語です。

【出演】

源頼光	—	柿崎 直昭
ト部季武	—	橋本 潤
坂田公時	—	高松 一真
胡蝶	—	塚本 修久
土蜘蛛	—	明石 頼範

大太鼓	—	佐々木 尚大
小太鼓	—	芝寄 勝太
手打鉦	—	川上 翔子
笛	—	比良 真紀子

※出演者は予告無く変更になる場合がございます。

20:00～ 演目②

八岐大蛇 ～やまたのおろち～

この神楽は、皆さんもよくご存じの神話を基に作られた演目です。

高天原を追われた須佐之男命(すさのおのみこと)がたまたま出雲の国、肥の川の上流を通りかかったとき、嘆き悲しんでいる足名椎(あしなづち)、手名椎(てなづち)という老夫婦とその娘、奇稲田姫(くしいなだひめ)に出会い、嘆き悲しんでいるその訳を聞きます。夫婦には八人の娘がいましたが、毎年一人ずつ大蛇に飲み込まれ、最後に残った娘も近々連れ去られると聞き、尊は大蛇退治を決意します。

そこで、須佐之男命は一計を案じ、老夫婦に強い毒酒を作らせます。やがて、たな引く叢雲に乗って現れた大蛇に巧みに樽酒を飲ませやがて酔い伏して眠ったところで十拳の剣(とつかのつるぎ)を抜き放ち大蛇と格闘を始めます。そして、大格闘の末に大蛇を退治します。そして、大蛇の最後の尾から出てきた一振りの剣を天叢雲剣(あめのむらくものつるぎ)と名付けて天照大神(あまてらすおおみかみ)に捧げ、めでた奇稲田姫と結婚するという物語です。

【出演】

須佐之男命	—	佐々木 尚大
足名椎	—	吉川 幸雄
手名椎	—	塚本 修久
櫛稲田姫	—	畝岡 佑作
大蛇	—	明石 頼範
大蛇	—	柿崎 直昭
大蛇	—	高松 一真
大蛇	—	芝寄 勝太

大太鼓	—	寺本 貴寛
小太鼓	—	比良 真紀子
手打鉦	—	浜口 亜由美
笛	—	川上 翔子

※出演者は予告無く変更になる場合がございます。

終演後(20:45頃～)記念撮影会を実施します。どうぞ最後までごゆっくりお楽しみ下さい。

※記載の時間は目安です。多少前後する場合がございますので、あらかじめご了承ください。